

Title	シャルル・バルバラ『赤い橋の殺人』(その二)(訳・註)
Sub Title	Charles Barbara : L'Assassinat du Pont-Rouge II (traduction et notes)
Author	Barbara, Charles(Kameya, Nori) 亀谷, 乃里
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.48 (2009.) ,p.35(50)- 54(31)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20090331-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シヤルル・バルバラ 『赤い橋の殺人』ボン・ルージュ (その二)

亀谷 乃里 訳・註

(前号より続く)

四 クレマンの家庭

クレマンはシエルシユ・ミデイ通りにある古い建物の四階のアパルトマンに住んでいた。素朴で小さい家具調度は、色々な店で中古で買い求めた家具特有のあの色彩の不揃いが目についた。そこでは、悲しみを呼び覚ましそうなものはすべて注意深く避けてあった。光溢れる住居すまいの、高い天井の室の壁と窓には、赤、緑、青色の大きな花模様の散らされた明るい色調の壁紙とカーテンが配されていた。

一人の老婆が扉を開けに来た。マックスが話さないうちに老婆がいった。「御主人はお留守です。」しかしマックスが階段を降りかけていたとき、恐らくは秘密の覗き窓からだろう、友人を認めたクレマンが現われて呼び戻した。

「こちらから来てくれ給え、」クレマンはいくつもの室を通り抜けてマックスを引っ張って行きながらいった、「この方が静かだろう。妻は病気で寝てるんだ。お乳を飲ませられないので、子供を離さなければならなかった

んだ、それに妻はとても具合が悪いんだ。彼女にはまたいつか会ってくれ給え。」

彼らはすぐに小さな室に落ち着いた。そこには、一様な装丁の本がぎっしりと並んだマホガニーの書棚、キャビネット、——緑色の見せかけの二本の支柱の間には、光沢のある金属で補強された幾冊もの帳簿が並んでいた、——そして赤い皮革で被われた肘掛椅子の弧を描いた肘掛に向かいあつて書斎机があり、こうした物のためにその室は実業家の書斎を思わせた。

「少なくとも夕食は済んでないだろうね、」クレマンは友人にいった、「一緒に夕飯を食おう。」彼は力一杯呼鈴の紐を引きながら付け加えた。

老婆が駆けつけた。

「マルグリット、」言葉に表情豊かな身振りを添えてクレマンが大声でいった、「食卓をここに準備してくれ、二人分の食器を揃えて。」次いで、驚いて気をとらていることがありありと顔に表われているデストロワに向かっていった、「気にしないでくれ給え、哀れな婆さんは殆どつんぼなんだ。」

「彼女の様子でわかったよ。」マックスが即座に応じた。「僕が驚いているのは君が大きな声を出すからじゃないんだ。正直いうと、ここへ入つて来てから、僕が気付くこととまったく驚く事ばかりなんだ。」

「一体何をそんなに驚いてるんだい。」クレマンが尋ねた。

「何だつて！」デストロワがいった、「僕も見てきたが、君は十年というものその日暮らしをし、二週間毎にホテルを変え、ダンスホールに御輿を据え、有産階級ブルジョワの生活を飽きもせず嘲笑してきたというのに、君が結婚し、一家の父親となつて働き、金を貯め、公証人や郡長以上でも以下でもなく、自分の家庭でくつろいで生活するのを見て驚くなどというのかい。」

「それはまさに僕がそんな風に生活してきたからだ。かつてと違った生活ぶりを見たからつて驚くことはない

よ。」クレマンはいかにももつともらしくいった。

「少なくとも信じてくれ、」マックスは急いで付け加えた、「僕が驚いたからって君に対する嫌みなど毛頭ないんだよ。それどころか僕の驚きは、以前と全く違う君に出会って喜びを抑えきれずに声を上げてるんだよ。

一昨年おととしの秋だったと思うが、ロザリと一緒の君に会ったサン・ルイ・アン・リル通りのあのひどいぼろ家よりはここに君がいる方がそりゃ勿論いいよ。」

クレマンの神経を揺さぶった痙攣は、マックスが非常に辛い記憶を呼び覚ましたことの証拠だった。

「僕らの休息を憎いと思うのでなければ、」と陰気な様子でクレマンがいった、「あの不幸な時代のことを決して話さないでくれ、特に妻の前ではね……そして、新しい状況を見てうっとりするのを止めて僕を喜ばせてくれ給え。ことの始まりを話せば、多分今の状況が本当にささやかなものだとか心から思ってくれるだろう。僕は身を屈めて恥ずべき数々のことをどうしても身をもってしなければならなかったばかりか、現在の身分に辿り着くにはどんなに時間がかかったことだろう！ 見たところはそんな風には見えない。だけど、君が今見てるつまらない僕の身分は、まだとても不安定だとはいえ、それでも少なくとも二年間の日ごとの闘いの産物なんだ。というのも、僕が君を見かけなくなっただけからとちやうど同じくらいの年月になるのだ。」

「いや！ そんなにはならない。」デストロワがいった。

「しかし僕の帳簿が証拠だよ。」クレマンがいった。

「帳簿もつけてるのかい。」

「無論だ、」クレマンは即座に応じた。彼の顔は喜びに輝いた、「それに日記もね！ 僕がそれを思いついたときから、一サンチーム単位の正確さで収入と支出の内訳を説明できるばかりか、毎日の、毎時の、毎分の報告ができるよ。見せるよ。」

実際クレマンは立ち上がってキャビネットのところへ行った。

「そんなことしないでいいよ、」マックスがいった、「君が前より幸せだと知るだけで十分だよ。」

クレマンは固執した。

「いや、いや、」彼はキャビネットの帳簿の一冊を机の上に置いてさらにいった、「君はそこから自分で何か情報を取り出せるだろう。それに僕について難癖をつけるような人達に君が訳を説明できるようにしておいた方がいい。」

「人が君にどんな難癖をつけようってんだ。」

「ふん、いろいろと。」クレマンは曖昧にいった、「沢山敵がいるんだ！ 僕が警察関係者だといいいのだが、例えは……」

デストロワが会計簿はよく読めないとはつきりいったにもかかわらず、クレマンは帳簿を眼の前に突き付けて注意深く見ざるを得なくさせた……

「君は思い違いをしている、」クレマンはデストロワにいった、「数字ってそれが黒い程は悪魔的じゃないよ。子供の理解を超えるものは何一つない。こちらが収入の欄、次に支出の欄だ。こちらの欄の詳細は勘弁してやるよ。それは僕のためのものなんだ。だけど収入にざっと目を通すことはできるよ。リストはそれ程長くはないし、すぐに見終わるよ……」

「最初の三ヶ月は、僕の職から入る金以外は支払いを受けなかった。見ろよ。一月、百フラン。二月、同上。三月、同上。計………三百フラン」

「次の三ヶ月は、加えて一ヶ月につき二十五フラン、計………三百七十五フラン」

「僕はカトリックのオーダーメイドの靴業者に頼まれて『楽に質素に靴をはく技法』^{パンフレット}について小冊子を書いた

んだ、それは五百フランになった、計……………五百フラン」

「この小冊子は僕の知る限りでは出版されなかった。多分、これからも出ないだろう。そんなことはどうだっていい。それに本には僕の名前を出さないよう取り決めてあるんだ。」

「三期は、これまでより働いたというわけではないが、一ヶ月、百二十五フランの代わりに、百五十フラン支給された。ところで、もし僕が間違っただけならば、それは一年間続いている、つまり全部で千八百フランになる、計……………千八百フラン」

「その間に、色んな仕事をしたんだ、中でも、宗教関係の本屋のために『信仰の小冊子』数巻、『童話集』、『聖者伝』を書いたんだ。本当に、どれも皆相当いい収入だったんだよ。計……………九百フラン」

「さらに自費で『信心家年鑑』を出版したんだ、これは手取り二百フランの収入になった。計……………二百フラン」

「付け加えるならば、君も知る僕のきれいな書体に魅せられたZ……………公爵が、一ページ一フランの割合で、百五十ページの毛筆原稿を写させてくれたんだ。それはちょうど百五十フランになった。計……………百五十フラン」

「最後に、つい最近、内務省から、つまり一般救済事務局から、というのは僕は気位が高くないんだ、百フラン受け取った。計……………百フラン」

「要するに、御覧の通り、」とクレマンは得々として帳簿のページをひらひらさせて続けた、「僕はものすごく働いて沢山金を稼いだんだ。しかし不幸にも、僕らが必要とする物、シーツ、下着類、衣類、家具、食器、その他色々を考えると、そんなものは驢馬の口中の粟粒だった。その次のロザリの妊娠は必然的に出費の増加を招いた。産褥のとき家に一文もなかったことを思い出すとぞっとする。そしてこの危機を乗り越える力と方策とを

どこで見つけ出したのかと今でも不思議に思うのだ。とにかくどうあっても、また新たな借金をしなければならなかったし、またぞろ未来を当てにする他はなかった。幸いにもそれは期限がすぐ目の前に見えている一時の不如意だ。君が見るとおり、僕は事業をする決意をしたんだ。すでに進行中のとても素晴らしい事業が十ほどある。不思議だろう。だが、僕は物質的に満たされているのが好きになった、尊敬されることに夢中になった、けれども永久にそのどちらにも十分には手に入れられないように思われる。少しづつではあるが昔からの借金を全部清算し、ゆとりのある生活をし、世間がいう、申し分のない誠実な紳士オネットムになりたいと強く望んでいる。それは簡単にごくだ。まず手初めに、もつと良い住居で、もつと殺風景でない界限に住むのを近々君に見て貰えることを期待している。きれいな家具を揃え、ピアノを買って、死ぬほど退屈しているあの哀れなロザリに音楽を習わせたいんだ。そのうちに分かることだが……」

こういいながらもクレマンは陰鬱な夢想に重くなった額を床の方に傾けていた。それは、少なくとも十分には満たされていない満足の告白であった。

彼が悦に入って次々と今披露した事柄については、非常にはっきりとした証拠に基いたのでその信憑性は疑いを挟まなかった。だからマックスはクレマンがどんな代価を払ってかくも素晴らしい職と、おまけに金儲けになるこれ程多くの仕事を得了のかを知りたいものだと思えばかりに心を奪われていた。

「僕が期待してたのはそこなんだ！」クレマンは立ち上がって突然叫んだ。彼は帳簿を閉じて元の場所に戻した。クレマンは準備された夕食を見て、それまでより穏やかな声の調子でいった。「テーブルについて、食いながら同じように大いに語ろう。」そして非常に皮肉な様子でこう付け加えた、「それに、予め計算され、明らかに意図的な僕の破廉恥な行為の話が聞かされて、君は卒倒するかもしれない。そのためにも力を付けておく必要があると思う……」

二人が向き合って腰かけて五分とたたず三口も食べ終えないうちに、耳の聞こえない老婆が不意に入ってきた。もう用はないとわかせておいたクレマンは、怒って老婆を睨み付けた。

「どうしたんだ。」クレマンは乱暴に怒鳴った。

「ロザリ奥様がお呼びです。」老婆がいった。

「ああ！」クレマンは苛立ちと不機嫌とを露にしていった、「あのロザリの奴は我慢ならない。あいつは一瞬たりと独りで居られないんだ。いつも俺がついてなけりやならないんだ。」

しかし、彼は友人に詫びて、マルグリット婆さんについて行つた。

こうした事すべてについてデストロワはどう考えるべきかわからないうちに、眼には心を楽しませることができ物しか見当たらなかったものの、やはり強い悲しみの漂う空気に胸を締めつけられるように感じていた。それはざつと行って、輝く楽しいな台所で焼肉のいがらっぽい煙が喉を襲って息苦しくさせるようなものだった。

クレマンはすぐに戻ってきた。

「さあ、もう邪魔されないよ、あいつには阿片を飲ませた。」

「彼女どうしたんだい。」マックスが尋ねた。

「僕の知つたことか。」クレマンは肩を上げていった。「あいつは眠れないんだ、眼を開けたままで夢を見てるんだ……そんなことは打っちゃって置いて、いいかけていたことに戻ろう……」

五 彼の打ち明け話

暫く黙って食事をした後、クレマンは再び話を続けた。

「君はただ仕事の名ばかりに唾然とし、僕がどうやってそんな仕事を得たのかと不思議に思っている。そんな

ことは簡単なことだ。人間とは、どんな法外なことにも意を決しさえすれば必ずやつてのけられるもののようにだ。二年前、僕が就いていた職をどんな状況で受け入れたかを思い出す。聞いてくれ給え。僕は病が癒えようとしていた。見るも恐ろしいばかりに憔悴していた。真冬で厳しい寒さだというのに、肌着を着ていないばかりか、綿布のズボンと形の潰れた靴と、それに似つかわしい灰色の帽子とを身に付けていた。いつも他人の親切心を当て込み続けたために、僕にはもはや無慈悲なまでに情容赦のない人々しか残っていなかった。それに、人間とは犬のようなもので、ぼろ着が理性を曇らせるのだ。というのは、僕を見るものは軽蔑の念はおろか恐怖心を抱いた。どうしてもまだ生きていたければ、偶然にも手に入ったたった一本の頼みの綱に縋らなければならなかった。しかし、ときどき、激しい怒りがまるで鞭打ちの刑のように僕を鞭打った。機会があれば迷うことなく罪を犯しただろう。あるひどい災難がついに僕を激昂させた。月六十フランとあばら家を貫つて、それと引き換えに事務所の掃除をし使い走りをしていたのだが、その主人が突然姿を消したのだ。顧客の財産を奪い、家族を破産させ、店の者達の給料まで、召使い達の給金まで奪い取ったのだ。この知らせを聞いたときロザリと僕とを襲った絶望はいい表せない。この男に奪われた六十フランは生活費の三十日分に相当した。確かに、僕らは未だかつてこんなに酷い情況には追い込まれたことがなかった。今度こそこの破滅から抜け出せそうになかった。そんなわけで、不毛の闘いに疲れ、我慢も尽きはて、自殺の計画を真剣に考えてその夜を過ぎた。そんな風にして生き続けるのに必要な勇氣に比べれば、死ぬ勇氣などはもの数でもなかった、そして、朝方に、幸か不幸か、一つの記憶が突然脳裡をかすめなかったら、僕らは確実に決めた事を実行していただろう……」

クレマン自身の言葉で話したからといってそのため別段彼が話した事柄の興味が増すわけでもないだろう。そのときから遡って六ヶ月ばかり前のある日、——その日、クレマンはちょうど新しい服を着ていた、——彼は一人の司祭と知り合った。しかもそれは、実に自分にはわからない間のことだった。生まれつきの酒好きの結果と

いうよりも、——というのもクレマンはほどほどにしか飲むのを好まなかったのだ、——驚いたことにクレマンは男女の集う中でいつの間にか少しづつ酔っぱらっていった。暑さで衰弱し、神経が昂ぶり、息をついて動きたい欲求と格闘していたクレマンは、人目を忍んでそっと外に出た。大気は酔いを募らせた。夜だった。眼は濁り、考えることには脈絡がなく、道行く人々や壁に突き当たりながら、一歩歩くごとに危うく地面に転がりそうになりながら、どうやってかはわからずに、サン・スユルピス広場に辿り着き、全く力が抜けてしまい、よろよろとよろめきながら神学校の鉄柵のところへ行ってその足元に倒れた。ここから眼を開くときまで、クレマンは何があつたのか憶えていなかった。そして何もなかった一室で椅子に仰向けに倒れているのに気付いたのであった。誰かが冷水で顛かみを冷やしていた。灯の光でクレマンは司祭を認めた。司祭は心を籠めて尋ねた。

「さあ、気分は好くなりましたか。」

クレマンは茫然としていた。

「一体、どうやって私はここに来たのですか。」クレマンは叫んだ。

「私が帰ってくると、」と聖職者は思いやりの籠もった声で答えた、「あなたは扉に寄りかかって倒れておられた。それで、失礼ながら介抱しようとしてここに運ばせたのです。」

道路で拾われ、多分警察の部署に運ばれる憂き目に遇わせないでくれた人に対して、クレマンが愛想好くしたのはごく当たり前のことであつた。だから、社会的身分に関して司祭が尋ねたのに対してクレマンは十分な礼儀を尽くして答えた。自分は止むを得ず、文筆家をやっているのだと打ち明け、次いで、もし自分の好きなことを続けていられたなら、とりわけ自然科学を勉強していただろうと打ち明けた。たまたま司祭は、昔そつと物理学と昆虫学とをやっていた。急いで話したことながら同じものに対して興味を領ち合うというこの共感から、二人の間には幾分かの気安さとする親密さが生まれた。それでもクレマンは、乱暴にもなりかねない率直さで、自分は

何も信じていないし、司祭達の大部分が大したことを信じていない、それはほぼ疑いないと明言した。司祭はこの告白に対して微笑むしかなかった。そしてそのことを敢えて隠さなかった。司祭はクレマンがとても気に入った、そして、また会えるなら大変嬉しいとはつきりいった。

「少々大胆なあなたの生活の中では、」と司祭はこの上なく楽しげにいった、「ふとしたとき助言が必要になることがあるかも知れませんが、またひとつとしたら推薦が必要になるかもしれません。そのときには私にいくらかの信用があることを思い出して、友情を試しにおいて下さい。」

そしてさらにいった。

「あなたの素晴らしい知性が無益なことに溺れているのを残念には思いますが、私が私利私欲のために動き、陰険にも説教であなたを苛めようなどという積もりがあるなどは思われませんように。私に対してはそういうことは全く心配御無用です。」

クレマンは儀礼的に司祭の名前を控えた。クレマンはこの司祭に会っても、いつもならずといていい程、聖職者というものが胸の中に惹き起こすあの軽蔑と憎悪の衝動は感じなかったのだ。だが、別れるとすぐにもう司祭のことなどは考えなかった。

しかし自殺を図るとき、何かしらしがみつく物を探しているときに、クレマンがこの司祭と、彼が手を差し伸べてくれるという申し出を思い出したのは自然なことだった。クレマンは万一を見込んで司祭に会いに行こうと決意した。この奔走に大きな期待をかけたしなかったものの、これが何もたらさないとしても、同様に何ら不幸を増すものでもなからうと考えた。クレマンは前もって行動計画を独りで練り、大胆な芝居を演じようと決心した。稀なことではないが、殆ど何も期待していなかったにもかかわらず、クレマンは嫌悪を催させる一つの訪問から非常に大きな利益を引き出した。フレピヨン司祭はクレマンをすぐ分って大いに歓迎した。

まず最初にクレマンはいった、「今、私はこんな窮迫状態にありますので、私の申し立ての誠実さを疑われるのではないかととても心配です。」

司祭の丁重な否定の後、クレマンは過去の生活が恐ろしいのだと打ち明けた。この恐怖はとても激しいのでもう少しで人生に片を付けるところだった。だが、司祭の思い出が引き止めたのだった。

「包み隠さず申しますと、」とクレマンは続けた、「あなたに対して私はまさに藁をも掴む溺れる者なのです。私には、他ならぬ生きる情熱が必要だった結果、あなたのお名前と役に立ちたいといわれたお気持ちとを思い出したので。ですから、何か御無理をお願いしようなどと思つて来たわけではありません。ただ申し上げますと、私の如き放蕩者のあざやかな改宗は大変良い手本となるかもしれません。」

尊敬すべき司祭は、それにしても、私が恩義を施したなどんでもない、と反駁し、しかしこんな風に考えるようになったクレマンに会うのは嬉しいことだと答えた。クレマンははつきりと自分の窮乏を語った。司祭はいそいそといった。

「私がつもの喜んで領ち合います。私はもつと豊かになりたいのです。しかしあなたに確実な後ろ楯を見つかるまでは休息しないことをお約束します。じきにきつと程々には満足できるようなあなたの職を見つけることでしょう。」

忍耐についてとても心地好いちょっとした説教がなされ、その結論は、できるだけ早く懺悔しなければならぬということだったが、説教の後で、司祭はクレマンに六十フランを渡し、数日後にまた来るように勧めて帰らせた。クレマンは希望で立ち直つて辞去した。クレマンは純真な実に慈しみ深い人間に出遭つたのだった。その愚直さに付け込むのはた易かった。クレマン自身の表現に従えば、「法衣にもかかわらず、フレピヨン司祭は律儀者、つまり愚か者だった。」

クレマンは、抜け目のない人間らしく、自分は非常に執心している女性と生活しているので、二つの改宗にかかわる問題であることをいい落とさないように気を付けた。程なくフレビヨン司祭は救済の金銭を再度渡し、幾人かの人物に、とりわけL……公爵と聖フランスワ・レジス会^①の会長に熱心に推薦しておいたと告げた。

その間、ロザリとクレマンは軽蔑と嫌悪とを胸に秘めて、——これはクレマンの言である、——自分を押さえ、告解場で膝まづき、罪の赦しを受け、聖体を拝受していた。規則正しく礼拝に行き、教会で一番明るい場所を選び、謙遜で悔悛した態度で人目を惹こうとした。二人は間もなく偽りの敬虔の代価を受け取った。両者に共通の聴罪司祭は間もなく、二人の関係を教会に聖化して貰い身分を正規のものにするよう急ぎ立て、将来を保障するためにこの従順な行為だけが待たれるのだと仄めかしさえした。二人は、すでに考えていた結婚に喜んで同意した。恋人を妻にすることに同意する貧者に備えて設立された聖フランスワ・レジス会は、律儀な職人達にするのと同じように二人を援助した。会は当然のことながらあらゆる費用を引き受け、その上、特別な好意で、家庭用の白布類^②、衣服、質素な家具類を提供した。そればかりではなかった。結婚して一週間とたたないうちにクレマンは一通の手紙を受け取った。その中で、この会の会長は、差し当たって管理事務所で現在空いているささやかな職を彼に提供することができると知らせていた。クレマンは承諾した。クレマンが自分の役割に耐えた我慢強さは、さらに新たな好意を得るだけの価値があった。それ以来、財産とはいわないまでも、少なくとも、近いうちに程々のゆとりは期待することができた。こうした事柄はすべて、死んだとき、友人のマックスに遺贈する積もりでいたクレマンの日記に細大漏らさず記されていた。マックスならそこから好奇心をそそる物語の材料その他を汲み取ることができらうからだ……

クレマンはさらに告白したものだ。「友人の前で仮面を脱ぐことだけが喜びなのだ、それは官能の快楽に近い幸せなのだ。僕は何でもできる。しかし嘘をつくことは我慢できないほど僕を苦しめる。僕特有のものと

看做されている信仰に対する軽蔑は、滑稽だと思つている諸儀式に参加しているときに抱く人知れぬ激しい嫌悪感にしか比べられない。ともかく、今のところは、もし教会への精勤の噂が広まるなら、話にもならない僕の改宗の本当のところが分かる人がもはや自分ひとりだけではないのだと思うことで、それをせめてもの慰めにしよう。

「しかし、」とクレマンは突然いつた、「詰まるところ、僕はこんな事はしたくなかつたのだ。」

六 彼の全貌

ここでクレマンはそれまでより断固たる口調になった。

「君はこう確信している、君は。」と彼はいつた、「我々は善悪の感情をもつて生まれ、『神』、『摂理』は存在すると。そんなものは人々が愚か者どもを利用するために手だてとしてゐる超物理的愚劣さにすぎない。要するに、君はそうしたあらゆる愚劣さの餌食になつてゐるのだ。ひどい幻想を君から根こそぎひっぱがしてお人好しの群から君を引っこ抜いてやりたい！ 僕を見給え！ これこそ僕の喜びであり誇りなのだ。僕はこうした信仰と偏見に対する活発で旺盛な生身の否定であるばかりではない。誠実、公正、美德と呼ばれてゐるものに対して、抜け目ない卑劣さがこれ以上輝かしい勝ちを収めてゐる例がかつてあつただらうか……」

彼は問いかけるように話し止め、間もなく次第に熱っぽさを募らせながら続けた。

「君は、僕が、自称してゐるよりは善良だ、と時々いつた。それは僕を知らないというものだ。偽悪家を気取つてゐるわけじゃない、いや、断じてそうではない。だから僕の評判がどれほど悪くても、本当のところは、さらにその千倍も悪いのだと僕が断言するとき、君は僕の言葉を信じていいのだ。人々に罪だとされてゐるすべてのあつた行為を点検するなら、僕が犯さなかつた罪は一つもないくらいだろう。僕の傲慢と利己主義エゴイズムは際限が

ないのだ。機会チャンスさえあれば、自分の最も些細な気紛れのために全世界を犠牲にしたっていいのだ。僕はとても愛された、けれどこれまで誰一人として愛したことがない。多年、借金のみで生きてきた。それを永久に返せる当てもないだけにますます嬉々として借金したのだ。友達の財布から平気で金を借りた、そして彼らの誰のためにも役立つよう尽くしたりなんか一度もしなかった。それどころではなかった。友達がもう僕の役に立てないとか立ってくれないと、すぐ悪口をいって名譽を傷つけた。ついには、手当たり次第あらゆる人を利用したり故意に欺くだけでは満足せず、この上なく下劣な遊蕩に楽しみを見出した、泥沼の中を悦に入って駆け回った。幾多の女性を犠牲にして生活するそんな汚辱を引き受けてたじろぎさえしなかった……」

絶えずよりいっそう激しい昂奮につき動かされながら、このときクレマンは立ち上がって大股へまで室をあちらへこちらへと歩き回った。

クレマンは続けた、「僕の前で神について述べられようものなら、たちどころに必ず神を冒瀆した。僕は神を呪い、挑戦した、あの神に。神がこの罵りと挑発とを聞いているのだと確信するためにその存在を信じたかったくらいだ。僕は人間が自分の魂を売ろうとしているその瞬間②に立ち戻りたかった……僕を見給え！」

マックスの前に立ちはだかり、胸に腕組みをし、顔面蒼白となり、顔を引きつらせ、額には臆面のなさを浮かべているクレマンは見るからに恐ろしかった。クレマンはさらにいった。

「僕は、罪深さのかたまりで、骨の髄まで腐りはて、穢れを背負っているのだ。僕の分子の一つ一つが悪なのだ。死刑執行人に引き渡され、牢獄へぶち込まれる人々の誰よりも罪深い僕、この僕が貧窮のどん底から裕福になるためには、そして身の安全を勝ち得、幸せになるためには、おぞましい役割を引き受けて、自分が実は嫌悪する色んな感情をあたかもっているかのように振るまい、よりいっそう卑劣漢になることに同意するだけだった！……」

デストロワは悲しみを満面に浮かべ、頭を振って疑いの気持ちを表わしていた。

クレマンはさらにいった、「僕は、肉体的苦痛には素直に身をゆだねられるだろう、だが精神的苦痛！ そんなものは糞喰えだ、そしてこれからもそんな苦痛なんて全く感じないだろう。僕は幸せだろう！僕は、社会の見方からすれば人間の中で最も見下げはてた人間だ、だが君は、かわいそうなマクシミリアン、僕が不誠実なのと同じくらい誠実な君は、数多くの苦痛に引き裂かれ、僕のような人間どもに侮辱され、罵られ、誹られて、惨めに生き、これからもそうして惨めに生きていくことだろう。」

矛盾することには、クレマンは、「ああ！何て苦しいんだらう！」といわんばかりに、「僕は、幸せだらう！」といっていた。マックスはそれでも、今日の彼の幸せがたとえ現実で心底からのものであっても、未来の幸せはどうしようとも、どうなることかはわからない、と注意をうながした。

「僕が確信していることを人力で捨てさせることはできない。」クレマンは叫んだ。「僕の心がかき乱されると主張するような思想については、僕はその人為的な源を非常によく知っているのでそれを踏みにじる力はたつぷりもっている。僕が人間を恐がるとでもいうのか。奴らに畏れ敬わせてやることなど朝飯前だ。奴らの前で図々しく演じてやるのさ、お望み通りの姿になってやるう、そうして尊敬を手に入れよう。」

「ほう、君は自分自身と折り合いよく生きていけないときにそれに対抗する自信もあるのかい。」デストロワが尋ねた。

「それがどうしたというんだ。」クレマンがいった。「僕は耐え難い人生にいつでも自分で終止符を打てるのだ。喜びや揉め事にうんざりすれば、死を抱擁しよう、虚無に身を沈めよう、永遠の眠りに入ろう。」

「どうしてそんなことが分かるんだい。」マックスは憐憫の情を抱いていた。

「神は存在し得ないのだ！」クレマンは言語に絶する激しさで反駁した。「神がどこから出てきたというのだ。」

どうして自分自身を信じずに神を信じるのだ。それに、この神たるや、過去と未来が分かちがたく、一目であらゆる事柄全体を完全に把握し、神にとっては喜びも苦しみも思いがけない事もあり得ないのであれば、この神は測り知れない倦怠に襲われ、その永遠性自体によって死んでしまうことだろう……」⁽³⁾

こうした悲しむべき議論を一から十まで知り抜いているデストロワは、この議論に留まってしまうかねない人々と議論することほどひどく耐えがたいことはないことを知っていた。

「こうした人々は魂のあらゆる躍動を幻影扱いし、」マックスはいった、「自らの知性をこの上なくありきたりの分別に隷属させるのだ。彼らはすぐにこう思った。自分の世界の外には何ものも存在せず、自分が分からないものは存在し得ない、従って、未知のものは自分と同等であると。そして最後には、直に手に触れるものの存在しか信じずに、こう叫んだのだ、神は存在しない！」と。なぜなら、彼らの偏狭な頭脳の中では神がどんな風に存在し得るのかが理解できないからだ。」

「苦しみがある限り僕は永久に神を否定する、」クレマンは極度に昂奮して叫んだ。「はつきりいっておくが、たとえ靴の中の小石に二週間苦しませざるを得なくなるだけで、僕は頑固にいうことだろう『否、神は存在しない』と。」

「僕にはその関係が理解できないよ、」とマックスはいった。「どこで苦しみが神の否存在とつながるんだい？ それは騒々しいおしゃべり女が、神様がいらっしやればそんなことをお許しにならないわ、というのと同じような言い草だ。苦しみは存在する、それは一つの事実なんだ。その後には、それが根本的に善であるか悪であるか、何故にそれが存在するのか、それが何の役に立つのかを知らなければならぬ。僕としては、本当のことをいえば、苦しみがないならいかなる存在の可能性も理解できない。それは互いに物質の原子を結合させる凝集力なんだ。生きとし生けるあらゆる人間、動物ばかりでなく、さらに、植物のように生育するすべてのものの息吹、

活気、維持力でもあるのだ。それがなければ、木が生命力を吸い込むあの無数の毛細管は活動せず、木は死んでしまうのだ。それがなければ、花は花粉を運ぶ風に萼を向けることを忘れ、不毛のうちに干涸びてしまうのだ。

我々に及ぼす苦しみの力はさらにもっと驚くべきものがある。言語、技芸、科学、工業——苦しみは人が人類に負っているあらゆる驚異の起源であり源泉なのだ。それは無為の中の我々を不安にさせて完成の可能性に向う道へと導く疲れを知らない刺激剤なのだ。それは我々を豊かにするのだ、それは偉大な思想と偉大な行為の母なのだ。人間の中の偉大な人々の数多くが苦しみの産物なので、あなた方の中で、最も苦しんだ者が、最も偉大な者となり、といえる程なのだ。それゆえ、人間を苦しみから免れさせたいと願って熱狂に満ちて立ち上がった善意の人々は、不可能に立ちはだかれて座礁したばかりでなく、彼らの精神の心髄がいかに偉大であったにせよ、深い洞察力よりはむしろ感情を立証したように僕には思われるのだ。」

「そりゃひどすぎる！」クレマンはある種の激しい怒りにかられて叫んだ。「なんだって！ 君は苦しんで嬉しいというのか！ なんだって！ もっともな欲望が満たされなくて君は嬉しいのか！ 馬鹿げた偏見に押し潰されて、喜びで一杯になるのか！」

「拍車を掛けられた馬や鞭打たれる馬は嬉しくはない、だがより速く走る。」デストロワは反論した。「僕は何度叫んだことか、『おお、友よ！ 僕を軽蔑し、無視し、出鱈目に評価して、傑作を作らざるを得なくしてくれ給え』と。」

「いい加減にしてくれ、」クレマンは我を忘れていった。「血が血管の中で煮え滾っている、激しい苛立ちで僕は何をするか知れたものではない。もし友達でなければ、僕の手の中でとくに君を粉微塵にしていただろう。こんな言語道断な意見を面前にして一体全体、僕に力の限りこう叫ばずにいるとでもいうのか、『僕は無神論者なんだ！』」

「君は無神論者だと思つてゐるのだ。」

「君はおこがましくも、僕自身より僕の心の内がはつきり見えるとでもいうのかい。」

「勿論だ。なぜかといつて、君は被いを下ろして灯が隠された角燈を思わせるんだ。角燈を持つてる人自身は中にある灯を見ることができないんだ。」

「僕は非常に強い確信をもつてゐるので、」クレマンは続けた、「そこからあり得る限りのすべての帰結をいつでも引き出せるんだ。この世で考慮に値するもの、好ましいものは金以外にはない、そしてそれを手に入れるための障害は法律だけで、罰せられずに法を犯すことができるときまでは法を擁護しなければならぬ。その他のものは偏見にすぎない。そうなんだ、そうなんだ、僕はそれを保証する、もし明日にでも刑を受けずに銀行の金庫から百万フラン奪えるなら、僕は躊躇ためらわずそうするだろう。」

「どうして早晚君が盗みを殺人に置き代えないだろうか。」デストロワは彼を狼狽させると信じていった。

確かにクレマンは躊躇ためらった。だがすぐに不敵さが勝を制した。クレマンは勢いを押し殺していった。

「もし殺人で富み、罰せられない保証があればどうしてそうしない理由があろうか。」

マックスは身振りでひどく怪しいものだといった気持ちを表していた。「僕はそこに飽くまで極端な虚勢しか見ないよ。」とマックスは確信のある語調でいった。「人は葡萄酒に酔うように思想に酔うもので、君はもはや自分を見分けられないほどに陶酔してゐるのだ。」

「どうやら君は相変わらず、僕がいい張るほど悪党ではないことを心から願つてゐるらしい。」クレマンはいった。彼の激しい熱は突然鎮まつて氷の冷たさにまで冷めた。「幻想を抱いてる。僕が君から幻想を取り上げたからといつて、今のところ、これより完全に何もかもを打ち明けたくなるほどではない。ただ参考までにこのことは知つておき給え。僕の懷疑主義セプティシスムは実に揺るぎなく、僕の休息はそのお陰なのだ。そして僕の唯一の意志の名

において、君のこの上なく堅固な論証などは、僕の眼には金輪際シャボン玉の値打さえもたないだろう。」

デストロワは驚いてクレマンを眺めた。彼は何かを証明したかったわけではないのだと言いつた。形而上学においては、人は何も証明できない、もしくは、それどころか、人が欲することは何でも、肯定も否定も、同じ説得力で証明できる、そしてしばしば単なる感情が多くの合理的な証明をも打ち負かすものだとは彼は考えていたのだ。

「君と議論などせずに、」とマックスはつけ加えた、「ただ単なる観察の報告をするだけにした方がよかった。もし我々の性向がけしからぬ行動に出るよう仕向けるとしても、私心が適切に行動することを命ずるものだ。人生のある瞬間をとると、——これは必定である、——我々の諸行為の総和からはこの同じ諸行為の質に精確に見合った喜びとか苦しみの平均値が生ずる。マントノン夫人が、清廉の中には美德と同じだけの巧妙さがある、といったとき、⁴彼女は勿論こうした事柄の真相をそれと分かっていたのだ。」

(続く)

註

1 聖フランスワ・レジス会……フランスのイエズス会士、ジャン・フランスワ・レジス（一五九七—一六四〇）の名前による。一七三七年に聖列に加えられた。『一九世紀グラン・ラルース百科事典』に拠れば、「パリや他の多くの町（都市）に聖フランスワ・レジスといわれる宗教団体が存在し、その主な目的は宗教的な婚姻と私生児の嫡出子化を容易にすることであった。」とある。

2 ファウスト伝説（十六世紀）の中で、魔術師ファウストは悪魔と契約を結び魂を売り、こうしてファウストにはあらゆる悪と快楽が可能になった。この伝説は、ゲーテの悲劇『ファウスト』（一八〇八—一八三二）で一躍有

名になり、フランスでは、一八三二年にはスタブフェールが、二八年にはネルヴァルが「第一部」を訳し、二九年にはノデイエの翻案が現われた。第二部はネルヴァルが一八四〇年に翻訳している。

- 3 「」内の条りは、バイロンの『カイン』、一幕、一四八―一五五行 (Byron, *Œuvres complètes*, t. IV, *Cain*, acte I, p.15 [traduction, Amédée PICHOT])、墮天使リュシフェールのセリフの無意識的記憶があると François MAROTIN ちんごんごんごん (≪ La Malédiction de Cain dans L'ASSASSINAT DU PONT-ROUGE de CHARLES BARBARA, *Roman et Religion en France* (1713-1866), Paris, Honoré Champion, 2002)

- 4 マントノン夫人 (Madame de Maintenon 1635-1719)。アグリッパ・ド・ヴィニエの孫娘でルイ十四世の二番目の妃。十六才で四十一才のスカロン (ポール・) と結婚したが死別し、ルイ十四世とモンテスパン夫人の子供たちの教育係を務め、その後ルイ十四世の寵愛を得て、内密に結婚した。王の死後は、子女教育のために彼女が創設したサン・シール学園に引き籠って暮らした。彼女の『書簡集』*Lettres* (1752, 2vol., 復刻版 ed. Langlois, 4 vol., 1935-39) には見るべきものがある。なお引用文は、『マントノン夫人とデ・スュルサン公妃の未刊書簡集』の中の一文である。

バルバラによる引用文 ≪ *Il y a dans la droiture autant d'habileté que de vertu.* ≫
 マントノン夫人のもの ≪ [...] il y a autant d'habileté dans la droiture qu'il y a de vertu ≫, *Lettres inédites de M^{me} de Maintenon et de M^{me} de la princesse des Ursins*, Bossagne, Paris, 1876, t. I, p.76.